

絢爛！帝都少女探偵団

赤い謀略を撃て！

羽沢向一
挿絵／R・Ex



あとみっく文庫／PDF立ち読み版

登場人物紹介

霧島美咲

Kirishima Misaki

帝都で有名な少女探偵。財閥の一人娘でプライドが高いが、人命のためなら進んで恥辱にまみれることができる。



ヒルダ・クネヒト

Hilda Knecht

ヒトラーユーゲント東京派遣隊長。ドイツでは有名なエリート少女。射撃の名手。

ソフィア・テレシコワ

Sofia Tereshkova

冷酷非情なソ連の女スパイで拷問のエキスパート。自身の性的欲望には忠実であり、男女問わず性欲の対象とする。

南一郎

Minami Ichiro

代々霧島家に仕えている一族の少年。美咲の助手で、専属の運転手。



人生の中で最も速く、最も大量の射精。尿管の中を濃密な精液が流れるビュルビュルという音が、耳の奥で鳴っている。

「あつ、あああ、顔に!!」

盛大に噴出する自分の精液がすべて、オリガの冷たい美貌にかかっている。きらめく銀色の髪から赤い唇まで、自分が出しつづける粘液にまみれている。

熱い白濁液を浴びた女兵士の顔が、氷の仮面が溶けるように、表情を変化させた。硬い宝石を思わせる青い瞳が、青い水と化して揺らめく。

唇が半開きになり、熱くぬかるんだ喘ぎをこぼす。

「あふうつ、はあ……あああ——」

白い頬が赤く染まり、頬に垂れる白い精液がより鮮明に浮き上がった。

凍てついた女兵士が蕩けていく姿が、一郎の快楽中枢を貫き、さらに射精の勢いを強くさせた。射精中により大きくなっていく快感に、恥ずかしい声を出さずにはいられない。

「うっ、おとおおう!!」

増量する精液を顔に浴びて、オリガは十本の指を露出した乳房に喰いこませる。自らの胸を歪ませて、半裸身を白蛇のように身悶えさせる。顔から滴る精液が、たわんだ乳房をさらに白く汚していく。

長い射精を終えた一郎の前で、オリガが体液にまみれる乳房を自分の手でこね、小さい

ショーツを喰い入らせた股間を前後にガクガクと動かしていた。

「はんん、ほおおう……いい——んんん、いいです、同志ソフィア……」

「気分はいかがかしらねえ、少年。童貞を捨てる前に、女の顔にぶっかけるなんて、普通の体験ではありえないわ」

ソフィアの冷たく甘い吐息が、一郎のうなじを舐めまわした。

「わたしの部下の女兵士は、精液を浴びれば、相手が誰であつても大きな快楽を感じるように、ソビエト科学陣によつて調整されているのよ。さあ、次は同志タチアナよ」

名を呼ばれたタチアナが前に踏みだし、同時にオリガも身体をくねらせて立ち上がった。二人の美女兵士の位置が、きれいに入れ替わる。

一郎の前に、今度は赤毛の女兵士がひざまずいた。

大量射精を終え、力を失つてうなだれはじめた亀頭に、タチアナの燃える赤毛とは対照的な冷たい視線がそそがれる。

不意に、男根が指でつかまれた。オリガと同じく冷やかで、体温を奪われそうな肌触りなのに、一郎の下半身はまた体熱を上昇させる。熱い血潮がドクドクと股間に集まり、萎えかけた分身を再び硬くたぎらせる。

美女兵士の白い美貌が前に傾き、薔薇の蕾のようにすぼめた赤い唇が、亀頭の先端に触れた。

「なっ、なにをするっ!? うくうつ!」

ブルブルツと身震いする一郎の亀頭全体が、難なく赤い唇の中に吸いこまれる。

「んふ……」

と、艶めいたタチアナの吐息が、雁首と唇の間からこぼれた。

自分の亀頭を、小便を出すところを、女が口に含んでいる。たった今射精したばかりで、まだ白く粘つく排泄物はいせつぶつのついていている部分が、女の口の中に吞まれている。

「んふ……ふっ、ん、んふっ……」

タチアナの呼吸までもが、亀頭を絶妙にくすぐってきた。

（し、信じられない! 女が、こんなことをするなんて。うつ、柔らかい。女の口の中は、こんなに柔らかいのか!）

驚嘆する一郎の目の前で、タチアナの顔が背後に退いた。唇に性感をこすられ、電撃が走る。

「ううああっ!」

ヌチュツ、ズチュツ、と濡れた摩擦音が鳴り、タチアナの口の中から亀頭が姿を現す。

ジンジンと疼く先端うずに、赤毛の美女兵士の濃い吐息をかけられた。

「あはああ……」

鈴口すずくちに付着していた精液が、きれいにぬぐい取られていた。かわりにタチアナの透明な

唾液にまみれて、ぬらぬらと輝いている。

タチアナは今度は口の外へ舌を伸ばし、猫が毛づくろいをするかのように、いよいよ膨張した亀頭を舐めはじめた。

ピチャ！ ピチャ！ズリュツ！

と、卑猥な音が一郎の鼓膜をくすぐり、男性器への直接の刺激を倍増させる。

「うあつ、や、やめろ！ そんなところをしゃぶるな！」

「さっきもそう言っていたけど、少年は腰を動かして、肉の刀を突き出していたわねえ。本当はもつとしゃぶってください、と言いたいんでしょう」

ソフィアが両手の指を、蜘蛛のように一郎の胸から腹へ這い進ませた。背中に押しつけられた巨峰乳の感触は、ますます気持ちよくなり、下半身の鮮烈な快感と共鳴している。

タチアナの舌は恐ろしく精密に動きまわり、適確に性感のつぼをついてきた。レコード針のように亀頭の表面で円を描き、一郎はよがり声を搾り出させられる。

ルチュ、んっ、ふっ、又チュウ、はふっ、と舌が鳴らす濡音と、甘い息が混じり、淫蕩いんどうすぎる音楽を奏でつづけた。

さらに舌先を細くとがらせて、鈴口を何度もつつかれる。ときには肉の幹を横に啜えられて、男根全体を万遍なく唇と舌が這いまわる。

（くうっ、ま、また、出そうだ）

大量射精した余韻が残り、一郎の性感は常よりも敏感だ。タチアナの精妙な悦楽の技術は、たちまち少年を二度目の限界へと押し上げた。

「同志タチアナ、少年からもつとたくさん吸い出してあげるのよ」

「あはああ……同志ソフィアの仰せのままに」

タチアナの悩ましい吐息とともに、亀頭が再び唇に吞まれる。

「うっ！ うわあっ！」

一郎は大きな驚愕を味わわれた。今度は亀頭が喉の奥へと入っていくのだ。肉幹を啜えたタチアナの唇の端から、甘い喘ぎが連続してこぼれるとともに、立派な勃起がズブズブと口の中へ吞みこまれる。

「んっ、んふっ、んんう……」

「く、喰われる！ 自分のが喰われてしまう！」

一郎の腹に、タチアナの唇が密着した。膨張しきった男根が美女兵士の喉の中に消えて、亀頭からつけ根まで粘膜でぴっちりと包まれる。指でしごかれるのとはまた違う斬新な快楽が、腰から脳天へ貫通した。

「はうううううっ！ 出るうっ!!」

一郎の腰が跳ね、腹がタチアナの顔に押しつけられた。熱い精液の奔流が、喉の奥へとぶちまけられる。はじめての女の体内への射精が、灼熱の喜悦を呼び起こす。

「出る、出るう！ おうつ—— おおおおううう……」

うめく一郎の肉棒が、ずるりと口から引き抜かれた。射精直後の性感帯が、喉の粘膜と舌と唇にこすられ、またもやピリピリと火花が走る。

外に出た男根には、一滴の精液も付着していなかった。タチアナの白い喉が大きく動く。皮膚を通して、中にあるものが下へ向けて移動していくのがわかる。

「飲んでる！ 自分が出した精液を、女が飲みこんでいる！」

まだ温かい精液の味と喉ごしを楽しむように、灰色の瞳がじつとりと潤み、唇の端があらでやかに吊り上がる。タチアナの白い顔が赤くほてり、内側から輝いた。

微笑みの形を作る唇を舐めまわして、上官に報告した。

「ふあああ……とても美味であります。同志ソフィア、んっ、んんっ——いいっ！」

タチアナが両手の指で自分の喉をさすり、体内にある精液を塗りこめるように胸をなでまわす。左手が腹を滑り下りて、黒いショーツの中心に指を喰いこませる。

「はあああああ……んっふううう……」

「楽しんでるわねえ、同志タチアナ。わたしも少年をごちそうになろうかしら」

一郎の両肩がトンと押されて、身体がくるりと反転する。右の腕にオリガの両腕がからみつき、左腕にタチアナの腕が巻きついた。

背中には、小さなブラジャーできわどく飾られた四つの乳房が押しつけられた。ソフィ

アの巨満乳ほどの迫力はないが、充分に少年を蕩かせる魅惑の触り心地を発揮する。

一郎の前にはソフィアが立ち、ゆらりと首を振った。

まとめていたが髪がひとりでにほどける。長い髪がどろりと波打ち、身体のまわりで妖しくうねる。一郎の脳裏に、以前に見た江戸時代の妖怪絵『濡女』^{ぬれおんな}の黒髪が浮かんできた。

「少年が見たがっているものを、見せてあげるわねえ」

ソフィアは両手の手袋を取らず、軍服の胸の金ボタンをはずすのではなく、いきなりスカートに手をかけて、一気に脱ぎ捨てる。

現れたのは、部下たちと同じ黒いショーツ。逆三角形の布の面積もごく小さい。

だが面積の小ささよりも別の要素が、一郎に衝撃を与えた。

「す、透けてる！」

ソフィアがこれ見よがしに前へ突き出したショーツは、黒ではなく薄墨色だった。逆三角形の布全体が細かい網目になっていて、内側の肌の色と形状を透かしている。

しかし一郎が目を凝らしても、恥丘^{ちきゅう}全体のふつくらとしたふくらみと、その中心に刻まれた縦の筋がぼんやりと確認できるだけだ。見えそうで見えないのが、いつそう視線を誘ってやまない。

一郎の関心をたつぷりと引きつけてから、ソフィアはひざまずいた。大きく突き出した胸の金ボタンをはずしていく。

「ああつ、着けていない！」

はだけた軍服から出現した胸には、ブラジャーなどなかった。布とボタンから解放されて、雄大な白い乳房が歓声をあげているように華々しく揺れる。

（お、大きい……）

軍服の上からでも巨大だとわかつていたが、押さえるものなくなったソフィアの乳房は圧倒的だ。大重量に引かれて、やや下がりが気味だが、しつかりと前にせり出している。少女のようにきめの細かい白い肌は、触れば体温で溶けそうだ。

左右二つの乳球の先端は、濃い桃色に染まっていた。冷たい女スパイの肉体の中で、そこだけが淫靡な高熱をはらんでいるように見える。

妖しい花卉のような乳輪の中心からは、肉の筒が、高く、太く、いやらしく、乳房の量感にふさわしく屹立していた。ソフィアが黒い手袋で乳房を持ち上げ、そそり立つ二つの乳首を、頭上の一郎へ見せつける。

「少年の背中にこすれて、乳首が勃^たつちやったのよねえ。とても気持ちよかったわ」

女が隠すべきものをさらしているながら、ソフィアは黒光りする革手袋をはめ、黒革のブーツを履いている。薄墨色の小さなショーツとあいまって、オリガとタチアナ以上に白い女体が強調され、一郎の男根にズキンと疼痛^{とうつう}が走る。

二度の射精でぐったりしていた分身が、またもや精力をみなぎらせ、亀頭をカッカツと

いきり立たせている。

赤く染まった若い肉のドームに、ソフィアの視線が集中した。

「わたしの胸と、少年のここが、いっしょに気持ちよくなるのよ」

自身の凶悪な乳房を左右の手袋の指で支えたまま、ソフィアが膝で前へ進んだ。

白い乳球の挟間に若い勃起が呑みこまれ、ソフィアが歓喜の喘ぎを渦まかせる。

「あはあゝゝああん。少年の熱くて硬いものが、胸にこすれて、とってもいい気分だわ」
男女を問わず、聞く者の胸を疼かせる音色だ。

後を追って、一郎もかすれたうめき声を搾り出す。

「ふおおおあああっ！」

一郎の腹に、左右の乳首が触れる。さらに腹と両脚の太腿に乳房が押しつけられ、四方へ広がる乳房の中に乳首が消えた。

「あふっ、んんん……すてきよ。少年の男がとっても熱くて、うふっんんゝゝわたしの胸がクリームみたいに溶けちゃいそうねえ」

「くっ、くうう……」

一郎は快感を言葉では表せなかった。オリガの手よりも、タチアナの口よりも、気持ちいい。

勃起が完全に乳房の間に没して、柔軟かつ弾力のある肉に隙間なくみっしりと包まれる。

とても人間の肉体の感触とは信じられない。

なにかに挟まれているのではなく、自分の肉棒と敵の乳肉がともに融解して、ひとつに混ざり合う異次元の愉悦に襲われる。ところどころになつてゐるのに、強い圧迫感。男根だけでなく身体の手てを、強い弾力に押し包まれているようだ。

そして、ひんやりしている。冷たさが肉体の悦楽になることを、一郎ははじめて知つた。乳肉の冷氣が、一郎の体内の欲望の熱を煽りたてている。

目の前では、ソフィアの美貌が、白い頬を緋色に染めて、淫らな歡喜を立ち昇らせている。

「はああ、んんんたまらないわん。少年の立派なモノで、胸を犯されるのは大好きよ。うっん、あふ、もつとわたしを犯してん」

妖しい言葉に反して、実際に犯しているのは、間違いなくソフィアのほうだ。十本の黒革の指先を乳肉に喰い入らせて、乳房全体を別の生物のごとくうねうねと蠢かせる。

ソフィアは自分で巨美乳を揉みしだいて、自慰を見せてつけている。同時に一郎の男根は揺らめく白い肉に嬲られて、たちまち三度目の限界へ押し上げられてしまふ。オリガやタチアナに責められるよりもはるかに速く、男の絶頂のときを迎えようとする。

「うっ、うああっ！ や、やめろっ！ はううっ！」

もはや自分が射精するという感覚ではない。豊乳の魔力で、精巢の中から精液を奪われ



ている。

ビュル！ ビルビルッ！

「おんっ、おおおおお、出るう！ 吸い出されるうううっ!!」

最大の精液の流出音が、一郎の脳内に盛大に響いた。

ズリュッ！ ジュルウウ！ ビリュルルウッ！ ドブブブブブブッ!!

脳内だけにあるはずの轟音を聞いたかのように、ソフィアが一郎の顔を見つめて全身をわななかせる。

「あああゝゝ出てるわ！ 少年の精液で、わたしの胸が汚されているわ！」

秘部を透かす小さなショーツを貼りつけた腰は、激しく前後に動き、男と交わる恥態^{ちたい}を再現している。

敵の女が淫猥な嬌声をあげ、官能のダンスを踊るたびに、一郎の体内から新たな精液が、乳房の挟間へ向かって搾り取られる。命そのものを、巨乳という魔物に吸引されるようだ。

「うあああつ、止まらない！ 出るのが止められないっ！」

「わたしも胸が気持ちよくなるのが、止まらないわ！ はあゝゝイッてしまうっ！」

ソフィアが両腕を自身の乳房に巻きつけるように強く抱きしめて、絶頂の言葉を一郎の耳にたたきつけた。

「少年に、犯されて、イクわっゝゝイッちゃうう！ ああんゝゝソフィア、イクっ!!」

白い両腕がほどけ、肉棒をきつく挟みこんでいた乳房がゆるむ。途端に胸の谷間から白い飛沫が、火山のように噴きあがった。巨大な白い乳球全体が、精液でさらに白く塗りつぶされる。あふれた精液が、ソフィアの腹から股間へだらだらと流れ落ち、太腿を伝ってコンクリートの床に広がっていく。

「はあああああ……少年にイカされちゃったわ……」

ソフィアに解放されて、ようやく一郎の射精は止まることができた。

両腕をつかむオリガとタチアナが離れると、立っていることもできずに、へなへなと裸の尻を落としてしまう。

「まだよ、少年。もっとすることがあるわよねえ」

ソフィアが身体に浴びた精液をぬぐおうともしないで、精液に濡れた床に尻をつくくと、右手の指で薄墨色のショーツをつまんだ。どういう材質で作られているのか、濡れた薄紙のように下着が破れて、股間から剥がされる。

「これが、世界中の男が、ことあることに見たいと願っている、女の秘密よ」

両脚の太腿が左右に広がり、一郎の前に白いMの文字を形作った。左右の膝の下から先が黒いMだ。

Mの中心に両手の漆黒の指を添えて、ふつくと盛り上がる肉の丘を左右に割り広げる。「日本語ではなんと言ったかしらねえ。オマ○コでいいのかしら。ねえ、少年？」

ようやく鉄面男爵が右手を離し、近くのテーブルの上に乗った黒い箱をつかみ上げ、解放された美咲の右手に乗せた。

「それを着たまえ。もちろん、ここで、僕が見ている前で着替えるんだ」
まさに鉄面男爵が立っているのは目の前。手を伸ばせばとどく位置だ。

「前もって言うておきますけれど、わたくしは男の前で服を脱げと命じられて青くなるような、神経の細い女ではないですことよ」

「けっこう。僕もそういう神経の太い女でないと面白くない。さあ、その僕の美的感覚にそぐわない服を脱ぐんだ！」

「ふん」

お嬢様らしくなく鼻で笑って、箱を別のテーブルに置き、両手で囚人服の裾を握った。
鉄面男爵がじっと目を凝らしてくる。

（恥ずかしい）

胸の奥で、頭の裏で、美咲の少女の部分が叫んだ。男の前で全裸に剥かれ、生まれてはじめての絶頂をさらした後でも、好きでもない男に見られて服を脱ぐのは、恥ずかしいに決まっている。

（恥ずかしい。だけれど、犯罪者の前で恥ずかしがるのは、もつとみつともないわ）

自分がヒルダと同じ思考をしているとは、美咲は気づかない。わざと銭湯の脱衣場の男

のように勢いよく囚人服の上着を脱ぎ、床に投げ捨てた。

現れた安いブラジャーに視線が集中してくる。美咲は自然と頬が赤くなったが、鉄面男爵へ向かつて胸を張り、毅然と言い放った。

「この下着は、わたくしの趣味ではありませんからねっ！ 共産主義者どもの安っぽい趣味ですわっ！」

両手をズボンにかけて、一気に下げた。ブラジャーとショーツだけの姿になって、箱の蓋を取る。

「なっ！」

折りたたまれた黒い服の上には、真珠のような光沢にきらめくブラジャーとショーツ。そして腰に着ける黒いガーターベルトが乗っている。

（ここで下着も取って、着替えると言うの！）

鉄面男爵に視線をめぐらせると、女を辱める悦びで細い目がギラギラと輝いている。

「その通りだ。わざわざ少女探偵のために、フランスから取り寄せたのだよ」

「あからさまな嘘ですわね」

ふざけた言葉に対する怒りを勢いにして、ブラジャーの背中の中のホックをはずし、床に捨てた。愛らしい胸のふくらみが現れ、桜色の乳首が天井の電灯に照らされる。

落ち着いた動作で、箱からブラジャーをつまみ上げた。途端に高い声が出てしまう。

「なんですよ、これは！」

信じられないほど小さい。真珠色の小さな三角形が、細い紐でつながっているだけで、前もって下着だと言われなければ、ブラジャーとはわからないしろものだ。

（これでは、胸の半分も隠れない。鉄面男爵の奴、変態すぎるわ）

しかたなく二つの三角形の布を、乳房に押し当てる。乳房の三分の一くらいしか隠れず、ブラジャーの周囲に柔らかい乳肉が盛大にはみ出している。

だが布の面積よりも異常なものを感じて、美咲は声を上ずらせた。

「おかしいですわ！」

ブラジャーの真珠色の光沢を持つ外側は、つるつるとして、とても触り心地がいい。

だが内側にはクリームのようなねっとりしたものが塗られていて、乳房と乳首にべつとりと貼りついた。

「それは上海から取り寄せた塗り薬だよ。わが社があつかう商品の中でも、こうずか好事家に人気の逸品だね。簡単に言ってしまうと、肌から染みこむ媚薬さ」

「そんなものを！」

「もちろんショーツの内側にも、たっぷり媚薬を塗っておいてあげたよ」

「救いようのない変質者ですわ！」

「すてきな褒め言葉だよ」

美咲は胸のぬるぬるを気にしながら、自分が穿いているショーツに指をかける。羞恥心を悟られないように努めるつもりが、無意識のうちに鉄面男爵に背中を向けていた。

ショーツを下ろすと、尻を犯罪者へ向けたまま、急いで腰にガーターベルトを巻き、新たなショーツに脚を通す。

（これも、恐ろしく小さいわ！）

後ろ側は、ほとんど紐だ。尻の谷間に潜りこんで、外からは見えなくなってしまう。

前は狭い逆三角形で、恥丘を隠すくらいの面積しかない。両端が細長く伸びて、腰の両側に引っかけること、かろうじてずり落ちるのを防ぐ状態だ。

露出の多すぎるデザイン以上に、股間に染み入ってくる媚薬のぬめぬめとした感触がたまらなく不気味だ。媚薬を接着剤がわりにして、恥丘だけでなく肛門にも屈辱のショーツが貼りついてくる。

気持ち悪くてたまらないが、とにかく早く下着姿を隠そうと、箱から黒い服をつかみ出した。広がった服を見て、美咲はまたも嘔然とするしかない。

「名探偵はそれがなにか、わかるかな」

「フレンチメイドというものですわね。いかがわしい店で見たことがありますわ」

霧島家の屋敷に大勢いる、ちゃんと家事をしているメイドたちはヴィクトリアンメイドという。それに対して、エロチックなイメージを強調した遊戯用のメイドの衣装がフレン

チメイドだ。

鉄面男爵になにかを言われる前に、美咲は手早くいかがわしいメイド服に袖を通した。自分の身体に着てみると、ますます卑猥なデザインだとわかる。

黒く薄い布で作られた衣装は、胸ぐりが大きく開き、乳房のふくらみの上半分が覗いている。鉄面男爵が用意したブラジャーが小さいから見えないが、美咲が愛用しているいつものブラジャーなら、カップが露出しているところだ。

スカートの裾はきわめて短く、太腿の半分以上が外に出ている。前に身体を倒せば、尻が丸出しになりそうだ。

二の腕までの長さの袖口や、胸ぐりの周囲、そしてごく短いスカートの裾には、白いフリルがたつぷりとあしらわれて、かわいいデザインになっている。その愛らしさが、かえって着用者の肉体のエロスを強調した。

頭には、ホワイトブリムと呼ばれる白いフリルつきのカチューシャ。本来は仕事中に髪が乱れるのを防ぐためのものだが、フレンチメイドでは装飾の意味しかない。

腰には白いフリルつきの小さなエプロンを巻く。短いスカートよりもさらに短く、これも飾りでしかなかった。

両脚に黒いストッキング。太腿の半ばで、スカートの下から垂れるガーターベルトの先のクリップを噛ませる。その動作だけでも、短すぎるスカートの裾が揺れて、尻や股間が

チラチラと見えてしまう。

最後にエナメルのハイヒールを履いて、フレンチメイドが完成した。

鉄面男爵はホワイトブリムからエナメル靴まで視線を移動させて、歓喜の声をあげる。

「すばらしい！ どうだい、美咲くん。いつもふんぞりかえってメイドたちに命令しているお嬢様が、卑しいメイドの格好をする気分は？」

「わたくしはメイドたちを卑しいなどと思いませんわ。彼女たちは立派な職業婦人よ。わたくしや両親が安心して暮らせるのも、メイドたちのおかげだと、感謝していますわ」

「それでブラジャーとショーツの媚薬の具合はどうか？」

「なんともないですわ。不良品をスケベ爺たちに売って、暴利を貪っているのではないですかしら」

強がりではない。胸と恥丘がベタベタするのは不快だが、媚薬と聞いて想像する肉体の疼きやむずがゆさは、まったく感じられなかった。

「いいね。いっしょに来たまえ」

美咲の非難には答えず、鉄面男爵がコレクションに挟まれた隙間を、慣れた足取りで進んでいく。

美咲は少し足をふらつかせて、犯罪者について歩いた。動きやすさ優先でヒールの高い靴を履かない美咲には、ハイヒールが一番の難物だ。

鉄面男爵が開けたドアを通つて廊下に出ると、そこも似た状況だった。広い廊下に彫刻が並んでいる。いろいろなポーズの老若男女や動物が、一列になつて、廊下の曲がり角までつづく。

廊下にはもうひとつ、意味不明のものが存在した。彫刻の間を縫うように上端が輪になつた金属の杭が立ち並び、赤いロープが通してある。杭とロープも廊下の角を曲がつて視界から消えた。

さすがの少女名探偵も、はじめて見る異様な光景に、首をひねるばかりだ。

いちおうは紳士っぽい外見に反して、鉄面男爵がいじめっ子そのものの口調で命じた。

「美咲くんには、メイドの仕事として、僕のコレクションの彫刻を磨いてもらおう」

「雑巾かモップはどこですの？」

「そんなものはないね。メイドの服の胸で、彫刻の埃を拭きとるのさ」

「なんですって!!」

「赤いロープをまたいでだ」

「馬鹿じゃないのですの!」

美咲はあらためて、廊下をうねうねとつづく杭とロープを見つめた。

「どう見ても、昨日今日に造つたものではないですわ。前からこのくだらないことをして
いますのね」

「くだらないことに熱中するのも、男の浪漫というものさ。さあ、早く、ロープをまたぐんだ！ さもないと」

鉄面男爵の声音が、悪党らしく変化する。美咲はしかたなく手でロープをつかみ、右足を上げてまたいだ。右のハイヒールが廊下の床に着いた途端、絶妙な高さで張られたロープが、真珠色のショーツの中心に強く喰いこむ。

「あうんっ！」

自分の身体を感じたものに驚き、美咲は全身を硬直させて、下半身へ視線を落とした。フリルで飾った黒いスカートの裾を突き上げて、自分の股間をくぐった赤いロープが出てくる光景は、頭がクラクラするしろものだ。

ごく短いとはいえ、自分ではスカートの中は見られない。鉄面男爵に観察されている前で、自分の手でスカートをめくってみる気にもなれない。

ただ自分の股間がどうなっているのかは、簡単に想像がつく。恥丘の中心に、きつくロープがめりこんでいるのだ。

三日前の、はじめて他人に女の性感帯を觸られた感覚が、まざまざと脳裏に甦る。あのときはソフィアの性技で、経験のない肉体から強烈な快感を引きずり出され、生まれてはじめての絶頂を極めさせられた。

（今は、ただ、ロープを喰い入らせられているだけなのに、どうして……）

どうしての後の言葉を、形にするのがいやだ。認めてしまうと、より確実になりそうだ。「早く掃除をはじめたまえ、少女探偵霧島美咲くん。ほら！」

鉄面男爵の手が、美咲の背中を突き飛ばした。

「ああ——っ！」

硬直した身体が、押された勢いで前へ二歩三歩と出てしまう。ロープが後ろへ流れ、シヨーツ越しに股間をこすられる。

「はんんっ！」

もう、ごまかしようがない。鮮やかな快感の電流が、ロープにこすられた部分から全身に流れる。この二日間、意識から除外していた悦楽の記憶が、再び肉体の中心を占めた。

「あつ、ううん、どうして……」

ソフィアに嬲られたときの狂おしい快感とは違う。動かずにじっとしていれば耐えられる程度だ。

「気持ちいいだろう。シヨーツに塗った媚薬は特別な逸品だ。他の媚薬みたいに肉体を疼かせはしないが、快楽の感度を大きくしてくれるのさ。女の急所にロープが喰いこむ遊びは、慣れていない女には痛いだけだが、この媚薬を塗っておけば最初から気持ちよくなれるのだよ。こういうふうだね」

鉄面男爵の手が、美咲の尻の間から出ているロープを握り、強く引き上げた。



「なにをしますの！ はひいつ！」

ロープに乗った美咲の身体が浮き上がり、両脚のハイヒールが床から離れた。

自身の体重が股間にかかり、さらにロープが身体を中心にきつく喰いこんでくる。

今までは秘唇の外側に押しつけられただけだったが、閉じていた挟間を割って、恥丘の敏感な内側へ入りこんだ。ショーツが壁となつて、直接縄目が繊細な粘膜に触れるのを防いだ、そのためにおぞましい媚薬が肉襞や陰核にすりこまれてしまう。

「やあつ、く、薬が、染みるう……はううう……」

新たに女性器の内側に塗りこまれた媚薬が、すばやく効果を發揮した。めりこむロープにこすれた肉襞が、即座に快楽に蝕まれる。床につま先だけをつけて支える美咲の胴体が、どうしようもなくブルブルとわなないた。

（あつ、あああ、気持ちいい……すごく気持ちいいわ、ああああ……）

ロープがゆるみ、美咲はヒールを床につけられた。加重は軽減したが、秘裂の奥に入りこんだロープは外には出ない。

（挟んで立っているだけで、ああ、気持ちよくなつてしまうわ。これで歩かされたら、ロープがこすれて、もっと……）

「最初の彫刻は、高木光雨の『燃える空』だ。すっかり磨いてくれたまえ」

ロープの先にあるブロンズの男性裸体像に赤らんだ顔を向けて、美咲は目を見張った。

言われてみれば、そこにあるのは日本の近代彫刻の巨人匠の代表作だ。

「といつても、残念ながら贋作だがね。さあ、磨きたまえ」

また尻の後ろロープをつかまれ、斜めに高く持ち上げられた。ロープが傾くと、美咲の身体は前へ移動するしかない。ロープを媚薬ショーツで咥えたまま、ガクガクと脚を動かしてしまふ。

「んっ！ 磨くから、ロープを動かさないでっ！ はあああうん！」

ニチュ、クチュツ、と歩くたびに、濡れた摩擦音が鳴る。発情した肉襷が、ロープにこすれて複雑によじれ、望まぬ悦楽の火花が飛び散る。

それでも自分を失うような、激烈な快楽ではない。自分が乱れるのを、意志の力で止められる。むしろ麻薬のような陶酔がなく、理性がはつきりとしているために、恥辱もまた鮮明に感じさせられてしまふ。

（快楽に溺れさせられて、わけがわからなくなつたほうが、ましかもしれないわ）

一度はそう思うが、美咲はすぐに否定した。

（とんでもないわ。自分を見失う状態なんて、絶対に受け入れられないわ！ この屈辱を、しっかりとした意識で耐えるのよ！）

「すてきだろう、美咲くん。この仕掛けは女が自分で自分の性感を高め、開発していくのさ。これまでに何人もの女が、この彫刻の清掃に夢中になつたものだよ」

「はああ、ますます軽蔑しますわ」

美咲は汗がにじんだ眉根を寄せて、鉄面男爵をにらみつける。
けわしい非難の視線を浴びせられた鉄面男爵は、喜色を隠そうともしない。

「天下の少女探偵から蔑み^{さげす}の言葉をかけられるとは、犯罪のプロとして光栄の至りだね」
「ふざけたことを、あくうつ！」

またもやロープを動かされ、美咲は甘美な痺れとともにブロンズ像に飛びこまされてしまふ。フレンチメイド衣装の胸が、彫刻の硬い胸板にぶつかり、乳房がたわんだ。

「んっ、くうんん……」

ブラジャーの媚薬にまみれた裏地に、小さな乳首がこすれて、柔らかな気持ちよさがじわじわと広がる。

（ああ、胸にも、媚薬の影響が出ているわ！）

やはりソフィアの悪魔じみた指技に比べれば、はるかにゆるやかな快感だ。それでも官能の火が、経験の乏しい体内に着実に蓄積する。

『燃える空』は、たくましい全裸の青年が、両腕を頭上へ向けて伸ばしているブロンズ像だ。感じすぎる乳房を押しつけ、快美な刺激を受けていると、命のない裸体像を性的な目で見ないではいられない。

（な、なにを考えているのよ。ただの彫刻よ。ああ、情けないわ）

美咲は両手で『燃える空』の脇腹をつかんで、強い力が胸にかからないように注意して身体を動かした。ロープをまたいで立っているの、どうしても上体の動きに限定されてしまう。エロチックなダンスを踊るように、ゆらゆらと胸のふくらみをブロンズ像の胸にこすりつける。

「んんっ！」

（彫刻の筋肉の凹凸を、乳首で感じてしまうわ……これではブロンズ像に、乳首を愛撫されているみたい、よ……）

視線を上げれば、青年の希望をみなぎらせた精悍な顔が見える。女体の感触に歓喜しているように、美咲の瞳に映った。

（ああ、くやしい。くやしすぎるわ！）

胸の中は怒りで煮えたぎっているのに、喉から甘ったるい熱をはらんだ声が立ち昇る。

「はああ、あつ——くん……ん、こんな、こんなこと……」

怒りの炎が、じよじよに淫熱の炎に蝕まれていく。上半身を動かせば、下半身も当然動く。疼く胸を彫刻にこすりつけると、ロープを喰い入らせて濡れる股間も揺れる。下半身も絶え間なく淫靡な火で焙られつづけた。

蕩ける美咲の顔を、間近から鉄面男爵が覗きこんでくる。

「すばらしい芸術作品を、自分の身体できれいにするのは、気分がいいものだろう」

弾力を増した乳房の圧力を、セルゲイが必死に食った。敵国の兵士に銃弾を撃ちこむような怖い顔で、口からは機関銃の連射のごとく重いロシア語を飛ばしながら、腰をピストンさせている。

「喰らえ、喰らえ、喰らえ、喰らえ、喰らえ、喰らえ、俺の銃を喰らいやがれ！」ズブズブズブズブズブズブズ、とロシア語に合わせて乳房がこすれる音が鳴る。黒ずんだ肉棒の激しい動きで、乳房が餅のように縦に引き伸ばされ、平たく押しつぶされ、快感の電流が走った。

（犯されているのに！ こんな奴に犯されているのに、胸が気持ちよくなってしまう！）押しつぶされた乳房の間を、熱い肉塊がすばやく移動する刺激は、今までにない歓喜をもたらしている。亀頭が動くたびに、胸の奥から心臓と魂を引き抜かれるようで、息苦しくなり口をパクパクと開閉してしまう。

「んっ、むううっ、んじゅっ！ ふああああ、あううんっ！」

その唇の動きが、フェラチオを強要する兵士をいつそう悦ばせた。

「おお、たまらん！ 飲め！ 俺の射精を飲めっ！」

言葉に反して、精液が通る勢いで勃起が跳ね上がった。ヒルダの口内から亀頭が飛びだし、鈴口が鼻の穴にぶつかる。

「出るぞうっ！」

「やめて、そこは違うつ！」

ヒルダは顔を振って逃れようとしたが、兵士に金髪をつかまれて、固定されてしまう。
ビュクツ！ ドビュ——ルツ、ドブドブブルウウツ！

盛大な爆音とともに、鼻の穴に大量の精液がそそぎこまれる。

「ひゃぷつ、んぽおぷつ、ぷおおううつ！」

敏感な鼻孔内に、濃厚な粘液がどろどろと流される不快感に、ひとりでに涙があふれた。

「あぶつ！ くぷつ……ぷふううああ……」

兵士の手がゆるむと同時に、ヒルダはたまらず激しく顔を振る。涙といっしょに精液が飛び散る。

ソビエトの敵である少女密偵が見せる不本意な泣き顔が、他の兵士たちの射精のトリガーを引いた。

「行くぞ！ ヒルダ・クネヒトにぶっかけるんだ！」

「ソビエトの男の味を、たっぷりと教えてやるぞ！」

両手の中にあつた亀頭が同時に、ヒルダの額にこすりつけられる。

「や、やめろ！ これ以上はやめてくれ！」

叫ぶヒルダの鼻の穴と口から、白濁液がどろりと垂れ下った。みじめな顔がますます兵

士たちの欲望とサディズムを呼び、ドブドブツと額に二筋の精液がぶつけられる。

「や、やめて！ もう、これ以上は……んっ、うくう、気持ち悪い！」

前髪が白く汚され、両目が白くふさがれた。ヒルダは嫌悪で激しく美貌を引きつらせる。その上に重ねて精液をぶっつけられ、鼻や口の表面を滝となつて流れた。わななく顎から、白いシャワーがダラダラと滴り落ちていく。

セルゲイのうなり声の連射が、ガトリング銃並に速度と音量を増した。

「喰らえ、喰らえ、喰らえ、喰らえ、喰らえ、喰らえ、喰らえ、喰らえええっ!!」

ジュルジュルジュル、とヒルダの乳房の間に、ねっとりした高熱が広がった。

自分の胸の肉が酸で溶かされているような感覚に、ヒルダは苦痛と快感が混濁して、全身をよじらせる。

「はおうう——っ！ あ、熱いつ！」

身悶えるたびに、乳房の谷間から精液が湧水のようにあふれだす。顔から垂れた精液と混じって、乳房を白く塗りこめた。

さらに背後からも射精の集中砲火を浴びて、頭頂部から後ろ髪、そして黒い上着の肩から背中へ、どろどろの白いベールをかぶせられた。

熱いベールを通して、美咲のわめき声が聞こえる。ヒルダは顔の精液をぬぐって、視線を横へ向けた。今しも美咲の頭頂部に、ケーキを飾るクリームのごとく精液が乗せられる

ところだ。

「やめて！ 髪はやめてつて、ああつ、言っているでしょう！」

美咲の制止の言葉が、兵士たちに幼い少年のときの女子へのいたずら心を思い起こさせた。幼い無邪気さは、今は不純な肉欲と化している。射精する男の銃が、三本、四本と増えて、美咲の長く美しい黒髪を排泄液に浸した。

「あなたたち、乙女の命の黒髪を、ないがしろにしてつ、うぶぐううう！」

グリゴリーの太い亀頭が、また口内に押しこまれる。美咲がえずき、苦痛に顔を歪めるのを無視して、グリグリと喉の奥まで侵入してくる。喉の粘膜が、はじめての異物挿入の強制に悲鳴を發した。

「おごつ！ ぐうう、んぐぶうう——う、うぶおおおおつ！」

（痛い！ 喉が破れるつ！ 死んじやう——つ！）

脳裏に、写真や実際に霊安室で見た、喉を切り裂かれた女の遺体の姿が点滅した。美咲は両手でグリゴリーの胴体を押しのけようとする。

だが逆に他の兵士に手をつかまれて、無理やりに男根を握らされる。兵士が自分から腰を動かして、手の皮が剥けそうな勢いで亀頭をこすられた。

「いいぞ、小娘。俺の精液を直接、胃袋にぶちこんでやるから、好きなだけ味わえよ」
「んっ、ぶぶむ——ううううううつ！」

喉粘膜をさらに押し広げて、亀頭がいつそう膨張した。ヒリヒリする苦痛の中で、美咲は射精されると直感する。

「さあ、飲めっ！」

喉の奥で噴火が起きた。溶けた蟬せみを流しこまれているのかと思うほど熱い粘液が、直接食道を侵し、胃を汚染した。全身の血管に敵の精液が流れられるような汚辱感で、美咲の頭がいつぱいになる。

長い射精が終わり、ようやく肉棒が抜かれると、途端に美咲は精液を吐いた。

「ふわっ！ はふっ……かふうっ……けふけふ……」

自分が嘔吐した精液が、舞台の床に当たって、ひざまずく自身の膝に飛沫がかかる。

「かはあああつ、はあつ、こ、これで満足でしょう、はああ、ああつ！」

美咲の左右の脇の下に、グリゴリーが手を入れて、軽々と持ち上げられた。そのまま両脚が舞台を離れて、空中に浮かばされてしまう。

「な、なにをするんですの！」

下を見れば、美咲が吐くほど大量に放出した肉棒が、少しも衰えを見せずに、傲然とそびえている。

「これ以上は、ああつ、やめて！ やめなさい！」

背後の兵士が、フレンチメイドの短いスカートの中に手を入れてきた。小さなショーツ

がつかまれ、一気に引き下ろされる。

「ひいっ」

美咲は反射的にグリゴリーたちに蹴りを放とうとするのを、寸前で止めた。両脚をピクンと震わせる間に、何本もの手でスカートをつかまれ、いつせいにめくりあげられる。

包囲する兵士たちに、剥き出しの尻と股間をさらしてしまう。

女のすべてを見られる恥辱に、空中の身体が小刻みにわななく。

「俺たちはまだまだ満足していないことを、教えてやるぜ」

美咲の身体を、グリゴリーが下ろしはじめた。さらに左右に控える兵士に両足首を持たれて、Mの形に開かされる。

「ああつ、やめなさい！ あとで、ひどい目に遭わせますわ！」

一郎のことを考えれば、口で抗議するしかないが、兵士たちはゲラゲラと笑い返すばかり。この中ではグリゴリーの階級が高いらしく、足首を持った二人がうやうやしく、美咲の股間を亀頭へと誘導する。

（入る！ 立ったまま、この男に犯されるわ！ あっ！）

大きく割り開かれた太腿の中心に、硬い肉塊が触れた。瞬間、美咲を持ち上げているグリゴリーの腕力がゆるむ。

ズリュウウウウッ！

美咲自身の体重によって、一気に肉銃が膣の奥へ侵入した。

「ああっ、——あああああっ！」

強靱な鉄の槍に体内を貫かれ、口から内臓が飛び出そうだ。

「ひっ、ひくうっ！ お、下ろしてちょうだい！ 身体が壊れますわ！」

「心配するな。今すぐ下ろしてやる。つながつたままな」

グリゴリーが自分から尻もちをつくように、舞台に座りこんだ。グリゴリーの腰の上で美咲の身体が跳ねて、体内に強烈な震動が走る。

「はうううううう——っ！」

衝撃の反響が消える前に、腰をグリゴリーの両手でつかまれて、上下左右に揺さぶられる。美咲は自分の意志では動けず、男根をしごくための生きた道具あつかいだ。

「や、やめて！ 止めて！ おもちやあつかいなんて、絶対に許さないですわあっ！」

（あああ、でも、おかしいわ……）

最初の衝撃が薄れると、体内でグツグツと快楽が煮立った。

数日前に処女を失ったばかりの膣内を、極太の逸物でかきまわされている。それなのに自分の肉体が苦痛ではなく、悦びを求めはじめる。身体が勝手な反応をして、肉棒を喰い締め、しゃぶろうとする。

「気持ちよくなってきただろう。同志ソフィア様に一度責められた人間は、淫乱な身体に

変えられちまうのさ」

「そつ、そんなつ、馬鹿な、こと、あるはず、がな、いですわ！」

美咲は右に左に揺さぶられて、とぎれとぎれの声で言い返した。だが反論に対する反論のように、ヒルダの妖しい声が耳に入ってくる。

「はあああつ、やめろ、やめて——いやあ——あ、きやううんんつ！」

否定の言葉をくりかえしながら、声音は喜悦に染まっている。

ヒルダも半ズボンを奪われ、舞台に座ったセルゲイの腰の上に裸の尻を乗せられ、上下左右に揺さぶられていた。

グリゴリーと向かい合わせになっている美咲とは逆に、ヒルダはセルゲイに背中を向けた姿勢だ。ヒルダの乳房の間には、別の兵士の勃起を挟ませられている。両手にも他の男根を握らされ、喘ぎながら亀頭をこすっていた。

「いやだ。感じたくない！ 感じたくないのに——はおうううつ！ だ、だめえつ！」
ソビエトの淫技で覚醒させられた性感は、ヒルダを望まぬ官能の深みへ引きずりこんでいく。

何回も浴びせられた精液で白く染まった美貌は、後戻りできない高熱に照らされて、艶めかしく輝いている。表情からはドイツに身を捧げた少女密偵の誇りも意地も溶け落ちて、敵国から与えられる肉欲の渦に溺れる悦びだけがあった。

ヒルダを見つめる美咲の身体を、グリゴリーが前に倒した。触れられないまま膨張した陰核が、陵辱兵士の腹筋に触れて、グリゴリーとこすりたてられる。

「あつ、はああううん！　だめですわ！　そこはあああつ、んつ、んああつあ」

何倍にも増幅された官能電流に全身を感電させられ、理性が吹き飛ぶ。脳ではなく、肉体そのものが、せつばつまつた現状を訴えた。

「こんなのつだめええ——感じますう！　一番弱いところが、気持ちよくて、おかしくなっちゃいますっ！」

ヒルダの胸を犯す兵士が、乳肉を揉みたてながら、指で左右の勃起乳首をきつくねじりあげた。苦痛を生むはずの乱暴な行為も、今のヒルダには乳首に媚薬を注射されると同じだ。もともと炎が燃え盛っていた乳房が、さらに淫熱を高くする。

「ひやいいいっ！　乳首が熱いのう！　乳首気持ちいい！　胸を犯されるのも——膣を犯されるのも——すっごく気持ちいいいっ！」

「こんなこと、絶対に否定しますわ！　わたくしは気持ちよくなんか、なっていないですわ！　はひひいいいっ、だめ！　それ、だめですわっ！」

グリゴリーとセルゲイはどちらが多く、有名な少女を泣かせられるか、競争していた。熊のように吠え、重機のごとく腰を突き上げ、グチャッ、ズチャッと派手に女性器を鳴らしまくる。

「今度は胃袋ではなく、膣にごちそうしてやるぜ」

「今度は胸ではなく、体内にぶっかけてやる」

そろって、美咲とヒルダの身体を倒した。

美咲は背中を舞台にぶつけて、正常位になる。

ヒルダは四つん這いにされて、後背位を強制される。

「喰らえええっ!!」

叫んだのは、グリゴリーとセルゲイだけではない。美咲とヒルダを包囲していた円陣からも同じ言葉があがる。

「やめて！ 今、出すのは、許しませんわ！ あああ、わたくし、狂ってしまいますわ！」

「やめろう！ ボクがダメになるう！ くおお、ダメになっちゃううう！」

ビュルルウウウウ！ 美咲の身体の奥深くで、白い奔流が爆発した。

ドリユリユウウウッ！ ヒルダの肉体の奥底で、白い激流が暴れ狂う。

「ひいいつ、出されていますわ！ あおお——おう、イクっ！ 射精されて、イッち

やいますわ——っ!!」

「あああつ、身体が熱いつ！ 熱いいいつ、イクっ！ 精液が流れて、イッくうううううっ!!」

美咲は背中を強くそらし、頭と両手で支えるブリッジを作る。精液まみれの黒髪が広が

り、舞台におどろおどろしい模様を描いた。

ヒルダは顔を上げ、両手の指で舞台を引つかき、遠吠えをする獣じみた姿勢になる。力強くも艶めかしい姿だ。

二人の絶頂を待ちかまえていたように、周囲の兵士たちから射精の一斉射撃が放たれ、白い砲弾の群れが、空中を翔^{かけ}る。

美咲の黒髪と美貌と胸に、ヒルダの金髪と背中と尻に、精液の集中豪雨が降りそそぎ、すべてを白く塗りこめた。自分の全身から立ち昇る牡の性臭に溺れて、二人の少女は途切れなしに二度目の絶頂へ突き進む。

「はうおうおうう、イクっ！ イクイクイクイクいますわああ——あああああつ!!」

「んあ——ああああ、総統、総統おお、ボクはイッて、イッてえ、イクつづけますう!!」
精液の沼と化した舞台の上で、精液まみれの二人の美少女が、陸に上げられた人魚のごとくビチャビチャとのたうち、白い飛沫を飛び散らす。

「すばらしいわ!」

ソフィアが立ち上がり、一郎の首輪の鎖を強く引いた。一郎はうめきながら、テーブルの間を引きずられた。

「同志諸君もすつきりしたわねえ。明日はいよいよ思考爆弾による東京革命計画を実行するわ。仕事のない者は、明日のためにゆつくりと休むのよ」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 690円(税込)

2010 6月 下旬
発売予定!!



「当方Mドレイ希望」

魔界最強のプリンセスがドレイ志願!?

不死の吸血姫がDSのご主人様を募集
しているようです
【小説：酒井仁 / 挿絵：にの子】

魔海少女ルルイエ・ルル

【小説：羽沢向一 / 挿絵：ピエール☆よしお】

全国書店で
好評
発売中



「魔法の天使ルルイエ・ルル」

地球の未来はルルにおまかせよっ☆

2010 6月 下旬
発売予定!!



借金お嬢クリス3
令嬢はいかにして42兆円を返済したか?
【小説：筑摩十幸 / 挿絵：了藤誠二】



クリス、悪魔堕ち!?

「愛するジグレット様のため、死んでもらいますわっ」

既刊LINEUP

全国書店で好評発売中

- 仙術学園戦姫 / ノナガン! ①～③
- 青春期なアダム ①～②
- 幼魔 / 帝都少女探偵団 赤い謀略を撃て!

- 借金お嬢クリス ①～②
- プリンセスリバー / 交錯する美姫と魔姫
- BLANGEL 輪になって踊る患者の夜

- 無敵の姫騎士がDMに目覚めたようです
- ビルグリムメイデン ①～②
- 呪詛喰らい / 劇【カースマスター】



あとみっく文庫

既刊情報

仙獄学艶戦姫ノブナガツ!

第一次水着大戦

超能力者の少年少女たちが集う特殊な学園——西開学園、北宮学園、聖ジョウント学園。それぞれが仙獄島の覇権を求め、ちょっとHな三つ巴バトルの幕が開ける!! 平和なはずのミスコン勝負は、暗殺騒動が起きたり水着美少女が縄で緊縛されたり触手生物が現れたりで、とんでもない方向に進んで——!?

小説●斐芝嘉和
挿絵●SAIPACo.



全国書店で
**好評
発売中**

仙獄学艶戦姫ノブナガツ! 式

北宮学園生徒会長選挙戦

絶対的な権力を誇る北宮学園の生徒会長の座を競い、義元、氏康、晴信ら北宮三大美女はもちろんのこと、長尾く美姫>景虎、宇佐美く奈々>定満といった新ヒロインも加わり、エッチにバトルを繰り広げる!! 敗北したヒロインは勝者の奴隷に!?

小説●斐芝嘉和
挿絵●SAIPACo.



全国書店で
**好評
発売中**

詳しくはKTCの
公式サイトで <http://ktcom.jp/>



あとみつく文庫

既刊情報

仙獄学艶戦姫ノブナガツ! 参

信玄、出陣!

北宮学園の生徒会長選
拳戦も大詰め。肉欲に墮
ちた義元と氏康を従え
た景虎は、更なる戦力の
拡大を図る。そんな中、
信玄は元凶である按針
を倒そうと信長に協力
を求め、聖ジョウントの
エリザは封印された化
け物を発見する。様々な
思惑が交錯する物語は
佳境を迎え、信長は姦落
の危機に陥るのだが!?

小説●斐芝嘉和

挿絵●SAIPACo.

全国書店で
好評
発売中

BLANGEL

輪になりて踊る患者の夜

月下の街を紅に染め上
げる、鮮血のサスペンス
アクションの幕が上がる!
吸血姫アリシアは異形
の生物「被験体」の影を
追って戦い続けるが、予
想もしない反撃に遭って
虜囚の辱めに晒されて
しまう!!『隔月刊コミッ
クヴァルキリー』の長期
連載人気漫画が待望の
小説化!

小説●夜士郎

原作・挿絵●渡瀬行人

全国書店で
好評
発売中詳しくはKTCの
オフィシャルサイトで <http://ktcom.jp/>



あとみっく文庫

既刊情報

思春期なアダム

謎の少年ルシアの手で
“蛇眼”の力に覚醒した
藤田陸月。世界の半分
を支配する秘密を秘め
た彼をめぐり、天使と悪
魔そして人間による争
奪戦が始まった！ ごく
普通な少年の日常は一
変し、美少女天使のエン
ジューや憧れの同級生伊
部草マキナまで巻き込
み、激しくそしてエッチ
に胎動する！

小説●さかき傘
挿絵●天海雪乃



全国書店で
**好評
発売中**

思春期なアダム 2

背後をならう者

「世界の半分を支配する
力」を秘めた“蛇眼”の持
ち主として、天使たちに
保護されたごく普通の少
年、陸月。それでも普段
通りの学園生活を送る彼
の前に、新たな刺客が現
れる…。天使・悪魔・人間
の三つどもえのバトルは
より過熱！ “蛇眼”をめぐ
り迫り来る美女に美少女
&美少年(!?)たちの誘惑
で、陸月も新たな局面に…?

小説●さかき傘
挿絵●天海雪乃



全国書店で
**好評
発売中**

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトで <http://ktcom.jp/>



あとみつく文庫

既刊情報

借金お嬢クリス

42兆円耳を揃えて返してやりますわ

異世界の住人・ジグレットの奸計で父を失い、突如無一文となった令嬢クリス。なんとその借金額は42兆円! クリスは借金取り立てに現れた武装精霊ガーランドの力を借り、ジグレットへ借金返済の戦いを挑むことに! 果たして、傲岸不遜な令嬢はセレブな日常を取り戻し、己の貞操を守ることができるのか!?

小説●筑摩十幸

挿絵●了藤誠仁

全国書店で
好評
発売中

借金お嬢クリス2

42兆円踏み倒してやりますわ

セレブから無一文に転落したクリスは、借金を返すために今日もバイト&バトル! 水着コンテストで痴態を晒し、工事現場で肉体労働&ガーランドからの肉体調教と、八面六臂の活躍(?)に加え、ライバルのロリ令嬢、サキも加わり、エッチ&借金バトルはより熱く燃え上がる!

小説●筑摩十幸

挿絵●了藤誠仁

全国書店で
好評
発売中詳しくはKTCの
公式サイトで <http://ktcom.jp/>

コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト <http://ktcom.jp/>



title:

ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』

トキサナ

『DSの流儀』

chaccu

『生徒会長前哨戦?』

天道まさえ



title:

発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉

電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中! ※18歳未満の方は購入できません。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

ヴァルキリー



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry



<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille
ミルフィーユ



<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元
ドリーム**



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!